

釈尊にみる治癒体験

川田 洋一

今回のシンポジウムは、「宗教と医学」の関連性のなかでも、特に「治癒」と「倫理」に焦点をあてております。日独の双方から、仏教とキリスト教の視点から見た、それぞれの見解をのべて頂き、そこに普遍的な共通項を抽出していく努力をしたいと思います。

そこで、まず、私の方からは、仏教並びに仏教医学の原点である釈尊に見る病氣治癒への関わり方について紹介していきます。いうまでもなく仏教は、人々の生老病死の四苦を超克することを目指す宗教でありま

す。特に病氣の治癒においては、病苦を中心としながらも、死苦、老苦、生苦の三苦にわたる苦悩の克服にも及んでいきます。

幸いにして、釈尊は、太子の時、帝王学の一つとして医方明を学んでおりました。医方明は、当時の百般の学術を分類して五つとした五明の一つであります。医方明は、アーユルヴェーダ医学を基盤とした病氣治療の方法であります。釈尊は、医方明として知りえた当時のインド医学の治療を基として、さらに、名医者

婆からも最先端の医療を吸収しつつ、これを悟達の法

(ダルマ)のもとに位置づけつつ仏教医学として弟子に
教示したのであります。耆婆は、外科手術にすぐれた

医師でありましたが、釈尊の教えを根本に、多くの人々

を救っております。釈尊は、耆婆達の医師には医の倫

理を説き、同時に看護者には看護の倫理を説き、さら

に、患者にも、まもるべき患者の倫理を説いたのであ

ります。

今回、私は、釈尊が具体的に病の比丘を見舞って看

護した体験を考察することによって、仏教における「治

癒」の考え方を示したいと思えます。そこには、仏教

の法理が深く関わっております。仏教においては、病

気の治癒に、仏教という宗教がいかに関わったのかを

示したいと思えます。多くの仏典のなかに、具体例が

出てきますので、代表的なものを取りあげてみます。

(一)『大品』¹⁾

南伝仏教の文献ですが、この中に腹痛を患い、大小
便の中に埋もれて臥していた一人の比丘を釈尊が訪れ

た時のことが記されています。

釈尊は、この比丘の精舎に来て、問いかけます。

「比丘よ、汝は何の病を患ふや」

「世尊よ、我に腹痛あり」

「比丘よ、汝を看護する者ありや」

「世尊よ、無し」

「比丘等は何故に汝を看護せざるや」

「我、比丘等に於て為す所なかりき、故に比丘等は

我を看護せず」

釈尊は、どうして比丘等が汝を看病しないのか、と

尋ねたのに対して、他の比丘に対して修行者として為

すべきことを怠っていたから、自分が病気になった時

に、私を看病してくれないのです、と答えております。

釈尊は病気の比丘が、相互に看病するのが修行者

の務めであると説いておりました。この比丘は、他の

比丘の病を看なかつたのです。そこで、釈尊は阿難

と一緒に大小便に埋もれていた病の比丘の世話をし

始めます。

時に、世尊は具壽阿難に告げて云いたまへり、

「阿難よ、往きて水を持来れ、我等、此比丘を浴せしめん」

「唯々」と具壽阿難は世尊に應へ水を持来り、世尊は水を濺ぎたまひ、具壽阿難は洗へり。世尊は頭を取り具壽阿難は足を取上げ床に臥せしめたり。

釈尊は阿難とともに、病の比丘の身体を洗い、二人で床に横たわらせたとあります。

(ii) 『十誦律』(卷第二十八)⁽²⁾

漢訳仏典のなから、数例を取り上げます。

一人の病の比丘が伴侶もなく、大小便のなかに臥しているのを見た釈尊は、その比丘にその理由を問います。

比丘は次のように答えます。

「大徳、我れ性癩らくにして、他に事有るも我れ助けず、

我れ今病む、他人亦復我れを看す」

この比丘は性が怠惰であつて、他の人が病氣の時に、自分はその人を助けなかった。そこで、自分が病氣になつても、誰も見てくれないと述べております。この時に釈尊はこの比丘に「手当て療法」を行います。

病の比丘は、次のように思惟しております。

今佛の威神力手を以つて我が身を摩するに当に手を下したまふ時我が身苦痛即ち除癒し身心安楽なりと、是の比丘佛の大恩を念じ善心を生じ清浄の信を得、種種の願を立つ、佛の功徳を尊重し佛に於いて意を檢とむること一心なり、佛比丘の意に随ひて善く説法を為したまひ、是の比丘草座の上に在り一切諸法を受けず阿羅漢を得たり。

釈尊は自ら孤独な病の比丘の身体をきれいにし、ベツドをととのえ、衣を洗つて、看病しております。そ

して「接手」によって、身心が安らかになった比丘は、仏の大恩を感じ、善心を生じ、清浄の信によって、仏への求道心(意)を起こしております。その比丘の意に応じて、釈尊は法を説き、比丘は阿羅漢という境地を得ております。

(iii) 『摩訶僧祇律』(卷第二十八)⁽³⁾

この經典にも同じような記述があります。世話をしてくれる比丘がない一人の病の比丘に、釈尊はその理由を尋ねております。まず、釈尊は食事をしているかどうかを尋ね、比丘は食物を得られないので、食事をしていないと答えます。そこで釈尊は、この室に一緒に居る比丘はいいのか、と問うと、この比丘はこう答えます。

「世尊、我れ臭穢なるを以て、憊まざるが故に余處に徙り去りたれば、我れ孤り苦しめり、世尊。我れ孤独なり」

つまり、病の比丘が臭穢なので、同室の比丘が去っ

ていたので、自分は孤独であると告白しております。それに対して釈尊は、次のように言つて、病の比丘を励ましております。

「汝、憂惱すること莫れ、我当に汝に伴たるべし」

釈尊は自分があなたの伴侶となり、世話をするから、孤独を憂い、悩むことはない、と心の悩みを取り除きます。そして、釈尊は阿難と一緒に病の比丘の身体の清拭や室やベッドの清掃にあたります。その後、釈尊は、この病の比丘に「手当て療法」を行つております。

爾時、世尊は無量功德莊嚴の金色柔軟の手を以て比丘の額上を摩でて問うて言はく、「所患増せりとやせん、損せりとやせん」。比丘言さく、「世尊の手を蒙りて我が額上に至るに、衆苦悉く除こりぬ」と。

釈尊の手が比丘の額上をなでると、比丘の衆苦がごとごとく除かれたとあります。

そして、釈尊は説法するのです。

爾時、世尊は病比丘の為に随順し説法したまふに、
歡喜心を發し、已にして重ねて為に説法したまひし
に、法眼淨を得たりき。

病の比丘は釈尊の随順説法、つまり、その人に順じ
た説法を聞いて歡喜心をおこし、さらに説法を聞いて、
「法眼淨」という境地を得ております。

(iv) 『五分律』(卷第二十)⁽⁴⁾

この經典でも、性怠惰な比丘の世話をし、歡喜心を
起こさせ、さらに説法して法眼淨を得させております。

これらの仏典に記された釈尊の体験は、次のような
内容を含んでおります。

まず、釈尊が一人孤独な病の比丘の室を訪れ、その
理由を聞きます。病の比丘は、自分は性が怠惰であり、
他の比丘の病氣の時、世話をしなかつたので、今度は
自分が病氣になつても、誰も世話をしてくれないのだ、

また、自分は臭穢で他の比丘は去っていったのだと答
えております。

そこで、釈尊は、自分が汝の伴侶となろうと激励し、
自ら、また阿難と一緒に、病の比丘の世話をします。
その内容は、人間としての基本的ニーズ(本能的、生理
的欲求)に応えるもので、身体と衣と室を清淨にし、衛
生環境をととのえております。また、水、食料や薬物
などのニーズにも応えたと思われます。

こうして、病の比丘の孤独を癒し、心の悩みを除き、
環境をととのえらるとともに、「手当て療法」を行つてお
ります。

この「手当て」と、次の「説法」が、釈尊の看護の
特色となつております。釈尊の行つた「手当て療法」は、
この他にも多くの仏典に出て来ます。たとえば、『仏説
淨飯王般涅槃經』⁽⁵⁾には、臨終にあつた父淨飯王の願ひ
に応じて、釈尊は「手を以て父王の額上に著く」とあ
ります。釈尊の手によつて病者は、身体の痛みがやわ
らぐのみならず、心も安らぎ、心身ともに苦悩がのぞ
かれていますのであります。

心理学者エリクソンは、「老人期とコミュニケーション」を論じるなかで、人の「手」について、深い考察をしています⁽⁶⁾。まず、「手の中」という言葉について、次のように論じています。

『手の中に』という言葉ほど、患者にとって如何に人の手が重要かを明確に表すものはない。意識的に注意深く手を用いることが、孤独感や見捨てられ感を持つ患者への世話や彼らとの快い関係の中で、我々の人生をより意味深いものにする。手は、人が生きていく中で、生き生きとした関わり合いを持つために、不可欠なものである』

釈尊は大小便の中で、一人、孤独感や見捨てられ感にさいなまれていた病の比丘に、文字通り、「手をさしのべた」のです。釈尊と病の比丘の心が交り合い、そこで釈尊は「按手療法」を行ったのであります。この手による接触について、エリクソンは次のような意義を強調しております。

「我々は健康維持のための接触と、コミュニケーションのための接触との区別を心に留める必要がある。健康維持のための接触とは、からだを拭く、抱き起こす、食物を与える等の、からだの衛生と健康管理のための接触である。コミュニケーションのための接触とは、背中や肩をさする、手を握る等の、人間関係のための接触である。たとえ健康維持のための接触であっても、尊敬に満ちた人間味溢れる配慮を持って行えば、患者の心の中に、からだを拭かれる物、運搬される物として扱われるのではなく、人間として扱われるという感じを残すのである』

それ故に、病の比丘は身体的苦痛をやわらげるのみならず、心の中に、善心があふれ、歓喜心と釈尊への感謝と清浄の信により、求道心を起こしているのであります。

釈尊は比丘の法を求め心に応えて、説法しております。そして、比丘は病苦を乗り越えるのみならず、

法眼淨（真理を正しく見る眼）を得たり、阿羅漢（世の尊敬を受ける聖者）の境地に達したとされるのであります。積尊の説法によって、比丘は死の不安、恐怖を乗り越え、「真実の幸福」を確立していったのであります。これが、仏教の「治療」のあり方であります。

仏教では、生死の苦の内容を分析して、三種の苦、即ち「苦苦」「壊苦」「行苦」としております。この三苦は生老病死のすべてにとりもなうものですが、特に病苦と死苦は激しく突き上げてきます。病苦でも「死に至る病」では、三苦の中でも、特に「行苦」に悩まされるのであります。

第一の「苦苦」には、二種類の内容が含まれます。一つは生理的、本能的欲求がかなえられない苦しみであります。つまり、「基本的ニーズ」を求める本能的衝動です。水、食物、快適な住居等を求める衝動です。マズローのいう基本的欲求であります。他の一つは、身体的な痛みからくる苦しみです。現在では「ペインクリニック」の進歩によって、ある程度コントロールできるようになってきました。

この身体的痛みを増幅するのが、第二の「壊苦」であります。これは社会的、心理的な悩みを指します。たとえば、愛する人と別れなければならない苦しみ（愛別離苦）、逆に憎む者と会わなければならない苦しみ（怨憎会苦）、自分の欲望がかなえられない苦しみ（求不得苦）などを指しております。社会的、心理的ストレスを引き起こす苦しみです。この「壊苦」は、死を意識した時、あとに残す家族への心配、地位や名誉や財産への執着からも生じてきます。

「壊苦」は、精神的、心理的苦しみですから、看護体制や周囲の人の励まし、支持でも癒されます。

以上、二つの苦しみのうち「苦苦」は、医療の進歩（薬剤や手術等）によって、「壊苦」は周囲の人々の助けや福祉によって軽減できます。

しかし、第三の「行苦」は、病者自身で克服しなければならぬ苦しみです。「行苦」の「行」は、「諸行無常」の行で、現象界のあらゆるものは変化していくものだという意味です。この苦しみは、自己自身の実存の問題であり、死への不安や恐怖として生起してき

ます。

釈尊の病者への関わりのプロセスを分析してみますと、まず、基本的ニーズをかなえるところから、看病をはじめております。環境を清浄にし、おそらく必要な水、随病薬、随病食をととのえたと思われれます。それと同時に病者の伴侶となることによつて、孤独を癒しております。また、「手当て療法」により、身体的痛みや心の悩み、おそれを軽減しております。「苦苦」「壊苦」を克服したところで、病者のなかにあらわれた「善心」——感謝、歓喜、安心、信頼等に応じて、随順説法を行つております。その病者に適切な仏教の法理を説くことによつて、「行苦」を乗り越えさせたのであります。病者自身が釈尊の説法にふれて、死への不安、恐怖を乗り越え、生死の現象界を超越する「生死不二（二如）」の境地へと達していくのであります。こうして病者は、生死の基盤をなす「永遠なるもの」「宇宙的なもの」への覚醒へと促されるのであります。釈尊の「癒し」へのプロセスは、病者の心身を癒すにとどまらず、自己実現の究極である「永遠なるもの」に立脚した、

生死の苦をも超越した「真実の幸福」をもたらすものであります。こうして病苦の克服、つまり「癒し」は自己実現のための貴重な糧として、活かされていくのであります。

注

- (1) 南伝大藏経3巻・律藏3 大品1 525-526頁
- (2) 大正大藏経23巻・律部2 205頁
- (3) 大正大藏経22巻・律部1 455頁
- (4) 大正大藏経22巻・律部1 139-140頁
- (5) 大正大藏経14巻・経集部1 782頁
- (6) E・H・エリクソン、J・M・エリクソン著『ライフサイクル、その完結』みすず書房、村瀬孝雄・近藤邦夫訳 177-178頁

(かわだ よういち／東洋哲学研究所所長)